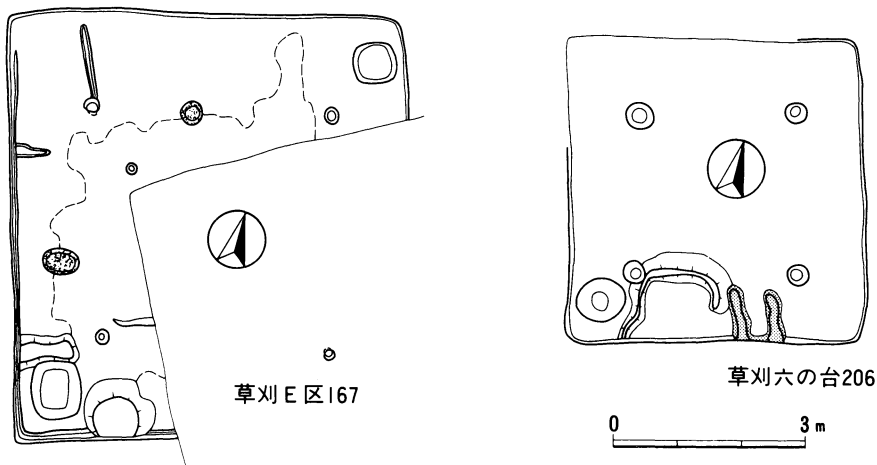


IX 補 論

古墳時代における竪穴建物の構造的変遷再論

筆者はかつて集落研究の最もミクロな側面としての、竪穴建物内の空間分割を、市原市草刈遺跡の資料を用いて論じたことがある。¹その後、石野博信や笹森健一が竪穴建物内の空間利用を論じた研究史と問題点をまとめている²が、笹森はさらに竪穴建物内の空間利用について興味深い論を展開している。そのうち論点の一つとなっているのがカマド出現期の竪穴建物の構造である。弥生時代～古墳時代を通して見ても、カマド出現期の前後は、竪穴建物の構造が最も変化を受ける時期と言えるであろう。本書で報告した地蔵山遺跡でも該期の竪穴建物が検出されており、その時期を中心に若干の考察を行ってみよう。

炊事空間の分離という視点 前稿で指摘したカマド出現前後の大きな変化は、カマド出現前夜～出現当初における炊事空間の分離である。カマド出現以前における竪穴建物内の火処は炉しかなく、しかも通常一ヶ所にのみ設けられることが殆どであったため、多くの機能を兼ねなければならなかった。そのため炉の位置は建物の片隅に置かず、入口の対辺の柱間、入口と正対する位置にあった。ところがカマド出現前夜～出現当初には炉を残したまま、別処に炉あるいはカマドを設ける例が存在する。前稿で図を掲載できなかった草刈遺跡E区167号跡を第63図に示すが、この例では入口の対辺側に炉を持ちながら、入口脇の貯蔵穴の北側にもう一つの炉を設け、そこにより強い火熱の痕跡を示した。この第二の炉の位置は出現期のカマドの位置と共通するものであるが、カマドを設置する該期の竪穴建物には炉を入口の対辺寄りに設けるもの、床面ほぼ中央に設けるものがある。これらの例は炊事機能を失った炉が、依然暫くの間その役割を果たし続けたことを示すものとして注目される。逆に言えば、貯蔵穴を傍らに置くと



第63図 カマド出現前後の竪穴建物跡 (1/120)

いう意味の他に、炉がその機能を失っていなかったがためにカマドを入口脇の貯蔵穴に寄せて設けることになったと思われる。中には第 図の市原市草刈六ノ台遺跡⁴206号跡のように入口を挟んで貯蔵穴の反対側にカマドを設けるものもあるが、初期の入口、貯蔵穴、カマドの位置関係は笹森も指摘しているように広範囲で共通性が認められている。地藏山遺跡でもカマドを持つ最初期のS I-013がこの配置をとっている。しかしその後のカマド位置の移行は比較的速やかである。まず炉とカマドを併設する例は少なく、入口、貯蔵穴の脇にカマドを設ける竪穴建物でも炉が検出されないものが多い。したがってカマドの普及とともに、一時的に残存していた炉は急速にその役割を失ったと思われ、その後カマドが入口の対辺に移る。貯蔵穴については、暫くの間設置場所が不安定で、依然入口脇や入口下などに置かれるものが多いが、また暫くしてカマド側に移る。筆者は以上の事実を以て高橋一夫や柿沼幹夫の想定⁵を否定したのである。この変化は、草刈遺跡という一遺跡の豊富な資料を用いて検証したが、この点については資料的優位性を持つと同時に弱点でもあって、より広範な地域での検証が不十分であったとも言える。尤もとくに北関東地方の報告書では入口位置が特定されていない（施設を検出していない）ものが多く、問題がある。しかしこの間の諸施設の位置関係の変化について、笹森の論点と筆者の論点は基本的に異ならない。にも拘らず笹森が「決して渡辺のいうように一時的に入口の脇にカマドが設置されたものではないように思われる」と述べているのは不可解である。入口の貯蔵穴寄りへの偏在を認めていないということなのであろうか。

貯蔵穴の問題 筆者は何らかの貯蔵、収蔵施設であると考えている。しかしその機能については諸説があり、とりわけ胎盤収納施設であるとする考え方が有力である。実際にはいずれの考え方にしても直接的な根拠があるわけではないが、胎盤収納の考定にはそれなりの魅力はある。しかし筆者がそのように考えないのは次の理由による。

竪穴建物内に貯蔵穴が一般的に成立するのは、南関東においては弥生時代中期後半であるのは明らかである。弥生時代中期後半以降の竪穴建物で貯蔵穴を設けないものも勿論あるが、長軸方向北側に炉、南側に入口施設を設け、その右脇壁寄りに貯蔵穴を設置するのが基本的な構造であると言える。それ以前の竪穴建物では、建物群の1/2なり1/3に貯蔵穴が検出されたなどという例は皆無であろう。それ故縄文時代の埋甕に系譜、連続性を求めるのは不可能である。では貯蔵穴が一般的に消滅するのはいつであるか。これについては古くから和島誠一らが指摘しているように、古墳時代末期から奈良時代であることは疑いえない。8世紀にはいると大型の竪穴建物であっても貯蔵穴はまず認められない。それではなぜ弥生時代の後半から古墳時代にのみ限って貯蔵穴が設けられるのであろうか。

須和田式期の新しい段階を含めて、弥生時代中期後半は環濠集落と方形周溝墓群の成立、大陸系磨製石器群が普及するなど現象的にみても大きな画期であるが、社会的には方形周溝墓に象徴されるように、最小再生産単位としての世帯の自立化の萌芽、それを単位とする宅地・耕

地占有意識の発生、世帯原理が優先することによる血縁紐帯の相対的脆弱化が想定され⁷、まさしく農耕共同体社会の成立段階と言える。生産用具や剰余生産物の管理が集団内のいかなるレベルで行われたかは議論の余地があるが、世帯単位での何らかの管理、収蔵が行われた可能性は充分である。そもそもある時点でほぼ一斉に建物内貯蔵穴が普及するという事実は、伝統的習俗での説明の余地が殆どないことを如実に示すと言えないだろうか。また古代国家の完成とともに建物内貯蔵穴が消滅するという事実もまたきわめて示唆的である。日本の古代専制国家における階級支配の構造は、基本的に共同体がそのままヒエラルヒーに組み込まれるという在り方である。その際共同体内にあった「もの」の管理は、中間的支配層となった郡司・里長層に集中したと考えられる。そこには収奪の強化という量的な変化ではなく、管理形態の質的な転換を認めるべきであろう。このように考えてこそ、多少の時間幅はあるであろうものの、特定の時点における建物内貯蔵穴の一般的消滅が説明されよう。

貯蔵穴そのものについて見れば、とくに弥生時代のそれはきわめて小容量である。しかも弥生時代から古墳時代を通じて貯蔵穴に蓋が存在したことはほぼ間違いないであろうし、入口施設下に設けられる例も特殊ではなく、日常的かつ出し入れの頻繁な貯蔵には適さない。笹森健一はそういったことに加えて、貯蔵穴内に原位置を留めたと思われる遺物がないことを理由に、貯蔵、収蔵施設の考定を否定する。しかし竪穴建物内に原位置を留めた遺物が残る可能性は、突発的な火災(人為的なものは除かれねばならない)、天災を蒙ったもの以外は低いものとなるから、決して遍く存在するとは言えまい。確かに中筋遺跡では貯蔵穴内に何の痕跡もなかったという事実⁸も重要であるが、例えば前稿で用いた草刈遺跡E区では、火災を受けたと思われる竪穴建物の貯蔵穴に完形の土器が置かれた状態で出土している例を複数調査しており、その事実も重視しなければならない。それ故前稿では、被災建物の遺物出土状況の分析の必要性を指摘しておいた。結局貯蔵穴の機能については未解決とせざるを得ないのではあるが、ここまで述べきったように、共同体的所有を離れ、世帯に帰属する「もの」の貯蔵あるいは収蔵施設である可能性は決して否定できないであろう。一般民衆の家屋であろうと、社会の経済構造の発展と遊離しては存在しえない。

再び空間利用について 笹森が述べている最も興味深い論点は、近世民家の土間空間と座敷空間の区分の淵源を古墳時代の竪穴建物に求め、女性空間と男性空間、そして両儀的空間としての内区の分割を想定していることである。さらに建物の主軸に対してカマドが右側に位置する右カマドの建物とその逆の左カマドの建物について、古墳時代を通じて右カマドが多いことから、右カマドを夫方居住、左カマドを妻方居住と推察する。この場合、貯蔵穴が胎盤収納施設であるという想定が前提の一つとなっているが、筆者のようにそれを肯定しない立場に立てば、笹森の論拠は弱くなる。また右カマドと左カマドの比率(笹森の論旨では右貯蔵穴と左貯蔵穴と置き換えても基本的に同義)が、古墳時代を通じて比較的安定しているか、漸移するの

であればよいが、もしそうでなければ問題は大きい。そして結論を先取して言えば、左右の比率の変動は小さくないのである。

ここでいくつかの遺跡を例示してみよう。まず3～4世紀の集落の例として市原市下鈴野遺跡⁹を挙げる。この遺跡では34棟の該期の竪穴建物跡が検出されているが、その多くで入口位置が確定されている。仮に入口と炉を結ぶ中軸線が建物のほぼ中央を通り、入口の脇に接して貯蔵穴を設けるものをA型、中軸線が左右どちらかに寄り、貯蔵穴を中軸線が寄った側の入口脇コーナーに設けるものをB型とすれば、A型が16棟、B型が3棟、他の15棟は貯蔵穴が検出されないなど不明確なものであった。弥生時代の終末期を含むA型では右側に貯蔵穴を設ける例が14棟、左側が1棟と右側が圧倒している。しかも左側の1棟は非常に小型の建物で、通常の建物は原則として右側に貯蔵穴を設けていると言える。ところが、B型の場合は貯蔵穴を右側に設ける例が1棟、左側に設ける例が2棟あり、例数が少ないながら左側のほうが多い。A型とB型では、明らかにB型のほうが新しく5世紀に継続するものであり、新しいタイプの建物で前代の原則が崩れることになる。次に4～5世紀の集落の例として千葉市蓑輪遺跡¹⁰を挙げよう。ここでは21棟の該期の竪穴建物跡が検出されている。建物のタイプとしては仮に呼んだところのB型で占められるが、そのうち右側に貯蔵穴を設けるものが3棟、左側に貯蔵穴を設けるものが7棟あり、他の11棟は貯蔵穴が検出されなかったり調査が一部に留まったりして不明なものであるが、炉の偏りを考慮すれば右側、左側それぞれに2棟ずつ追加される。それにしても右側と左側の比率は5：9となり、4世紀後半以降、むしろ左側に貯蔵穴を設けることが多くなるのが解る。なお蓑輪遺跡で確実に5世紀に編年される建物については、1：4で左側が圧倒する。5世紀前半の集落跡である船橋市の外原遺跡¹¹を見ても11棟のうち右側に貯蔵穴を設けるのは1棟しかなく、左側に設ける例は、確実なものに限っても3棟、可能性として6棟の建物があり、4世紀後半から5世紀前半までは左側が右側を凌駕する。

ところが5世紀後半からまた情勢は変化する。奇しくも冒頭で例示した草刈遺跡E区167号跡と草刈六ノ台206号跡は貯蔵穴を左側に設置しているが、全体として右側が増える。当地蔵山遺跡では左側に貯蔵穴を持つ建物は皆無であった。5世紀の集落跡でその後半まで継続する千葉市大森第二遺跡¹²では、5世紀代の平面構造が明確な建物跡で左側に貯蔵穴を設けるものは8棟、右側に設けるものは13棟で右側が多い。そのうち出現期のカマドを持つ建物が3棟あったが、いずれも貯蔵穴、カマドの配置は右側であった。5世紀後半に限定される集落跡、千葉市大道遺跡¹³では、明確に該期に比定される竪穴建物跡は12棟あり、ごく小型の2棟を除いてカマドを設置していたが、入口から見て左側にカマドを設けるものは015住居跡1棟(貯蔵穴は入口施設下)のみであった。対して入口施設下に貯蔵穴を、右側にカマドを置く例が1棟、入口の右脇コーナーに貯蔵穴、その隣にカマドを置く例は6棟、他は小型建物か構造不明のもので、左右の比率は都合1：7となる。6世紀にはいるとこの傾向はもっと明確である。6世紀を中心に

5世紀後半から7世紀前半までの多数のカマドを持つ竪穴建物跡が検出されている市原市中永谷遺跡¹⁴では、128棟中左側に貯蔵穴、カマドを配した建物跡は2棟、入口の対辺にカマドを持ち、その左に貯蔵穴を設ける例は僅か1棟にすぎなかった。これらのデータを見ると、4世紀前半までは入口の右脇に貯蔵穴を設けるものが圧倒的であったのが、4世紀後半以降、竪穴プランが正方形となり、貯蔵穴がコーナーに配されるようになるとともに急激に左側への貯蔵穴配置が増え、右側を圧倒するようになる。しかしカマド出現前夜にはまた右側に貯蔵穴を配置するものが増え、カマド出現以降また圧倒的に右側配置となって、貯蔵穴消滅まで続いている。より多くの遺跡を集成してみれば、上記の傾向は幾分緩やかになる可能性はあるが、ここで引用した各遺跡が船橋市から市原市にかけての狭い地域であることから地域差がここに表出されていることは考えられず、少なくともこの地域においては4世紀後半～5世紀に大きな変動があることは明確である。もし笹森が言うように伝統習俗としての女性空間と男性空間の区分を想定するとすれば、この約1世紀間の急激な変化の説明は殆ど不可能となろう。また小地域毎、あるいは遺跡毎に傾向が大きく異なっていたと仮定した場合も、小地域毎、小集団毎に習俗の相違があったと言わなければならない、ますます笹森の想定は成立しない。

以上、主として笹森健一の学説に対する検討、批判を述べてきた。他人の論考の粗を探して批判することは比較的容易い。それに代わる有効な説明を筆者が有しているわけでもない。勿論笹森の論考から筆者はさまざまな示唆を得ている。しかし結論として笹森が述べていることは、想念が先行して事実の検討を些か軽んじた結果のような気がしてならない。

また建物構造に関する多くの研究は、当然のことではあるが、竪穴建物の内側のみに于行われてきた。しかし1軒の「家」の持つ空間は1棟の竪穴建物内に限られず、竪穴建物内に居間、寝間、厨房空間、物置などすべての居住機能を想定することは多少の再検討を迫られるかもしれない。筆者が前稿で示した論旨は、いまだにある程度の真理は含んでいると考えているが、事実はそれほど単純ではないと感じている側面もある。今後新しい成果が蓄積した段階で、さらに考察を試みてみたいと思う。

註1 渡辺修一「古墳時代竪穴住居の構造的変遷と居住空間」『研究連絡誌』11 (財)千葉県文化財センター 1985

2 石野博信「研究史 竪穴住居の屋内区分利用」『文化史論叢』横田健一先生古稀記念会 1987

笹森健一「竪穴住居の使い方」『古墳時代の研究2 集落と豪族居館』雄山閣 1990

3 前稿で触れたとおり、小高春雄氏と筆者が1984年度に調査を行ったもの。未報告。

4 未報告。前稿の資料収集中に山口典子氏からご教示、実測図の提供を受けた。

5 高橋一夫「集落分析の一視点—入口と集落の道—」『埼玉考古』21 1983

柿沼幹夫「住居跡について」『下田・諏訪』埼玉県教育委員会 1979

高橋の論考については、南関東におけるカマド位置の変遷についての事実関係が基本的に異なることを指摘した。また柿沼の論考については、カマド出現期に土間空間の成立を想定した場合、床面の踏み締めによる硬化面の範囲、カマド出現後にまた南関東ではカマドの位置が変化することから矛盾が生じることを指摘した。以上の2点は事実によって明白である。笹森は註3文献で、柿沼の指摘が栃木県稲荷原遺跡でも確認

されたと述べているが、柿沼の指摘は笹森の論旨とも矛盾していると考ええる。いかがか。

- 6 和島誠一・金井塚良一「集落と共同体」『日本の考古学Ⅲ』 河出書房 1966
- 7 渡辺修一「方形周溝墓群に見る房総弥生中期社会」『千葉文華』24 1989
- 8 大塚昌彦『中筋遺跡－第2次発掘調査報告書－』 渋川市教育委員会 1988
- 9 大村直『下鈴野遺跡』（財）市原市文化財センター 1987
- 10 加藤正信『千葉市養輪遺跡』（財）千葉県文化財センター 1985
- 11 八幡一郎・他『外原－古墳時代集落址・滑石工房址の発掘調査－』 船橋市教育委員会 1972
- 12 柿沼修平・他『京葉』（財）千葉県都市公社 1973
- 13 白石浩・他『千葉市大道遺跡・生実城跡発掘調査報告書』（財）千葉県文化財センター 1983
- 14 白井久美子・他『千原台ニュータウンⅣ 中永谷遺跡』（財）千葉県文化財センター 1991